

◆西野周次 選 ～名句探訪～

今日何も彼もなにもかも春らしく 稲畑汀子

春告鳥の呼称を持つ鶯の初音に呼応する如、冬の重苦しく閉鎖された世界を刷新するように春はやって来る。春には勇気や夢を与える活力がある。万人に愛される桜を筆頭に次々と開花する花々。まさに百花繚乱で句材にも事欠かない。土筆、蕨、虎杖、櫨の芽等、食材も豊富。人事に於いても新たな出会いの予兆ある季節。そうした天授の恵みを祈りにも似た感謝の念で享受する作者が居る。「何も彼もなにもかも」と畳みかけることによって、移ろう季節への慈しみと、生かされて生きる残生への万感の思いがさらりと詠まれ絶妙な一句である。

春愁の指もて弾く天球儀 榎部天思

天球儀とは、球面上に天球上の星座などを記したものの。それを子細に調べるでもなく、只見遣りながら放心の体で小突き弄んでいる。単純な所作の繰り返しに焦点をあてる事により、春愁の深さと所在無さを増幅することに成功。「待てど暮らせど来ぬ人を宵待草のやるせなさ」と詠んだ大正浪漫の詩人、竹久夢二の描いた物憂げで何か言いたげな美人画の世界を想起させる。

一切の音遠ざけて大桜 徳本るり子

大桜と言わしめるからには人がたやすく辿り着けぬ場所に在るのか、それとも名だたる桜とも。見渡す限りに視野を埋めつくす桜にも魅了されるが、一木の大桜の醸し出す風情にも味がある。幾星霜を経て大樹となった桜には比類なき存在感がある。風にゆさゆさと揺れる様は幽玄で、見る人の心を根こそぎ捕えて離さない。一切の音を遠ざけて咲く桜。限りある命を全うしようとする桜と、それを受容し称える作者が何時しか同化していくような静謐な時間が流れている。

つぼみつぼみちぎつてすてて春の闇 西原みどり

移り気とも投げ遣りとも思える仕種。春の闇とはすなわち心の闇とも受け取

れる。蕾をちぎっては捨てる一見無造作で無意味に見える行為は、抜き差しならぬ人間関係に嫌気がさしたのか、思うに任せない自分への苛立ちなのか、あるいは理解してもらえぬことへのささやかな抵抗なのか。内面の複雑な心理の揺曳、屈折が透ける。ちぎって捨てる行為で心の安定を取り戻しているようにも解釈できる。ひらがな表記が、やや拗ねた感じの女性らしさをうまく表現している。

花の雲白き天守を担ぎけり

大西麻由子

日本人の誰もがこよなく愛してやまない城と桜の取り合せ。名城百選の上位を占める松山城（別称・金亀城）の絢爛豪華な桜咲く頃の様を見事に活写している。間隙なく密集し、幾重にも四方八方に広がり隆起する桜の景は、まさに花の雲の形容にふさわしい。

合格の絵馬の嘶く(いなく)青嵐

武智通次

青嵐とは蒼蒼たる野や林を吹き渡る強い風のこと。一筋縄では行きそうになり前途の不安も想起させるが、この句では、不安要素を払拭した風と解釈したい。入試は将来を決定する布石とも言うべき一大関門。当人の傍らの親族にとっても気の休まらぬ日々が続いたことであろう。合格の喜びの大きさが、「絵馬の嘶く」と詠み切ったことによって見事に表現された。

草取の庭は土俵よ待ったなし

吉川正紀子

じりじりと照りつける太陽の下、草を相手に消耗戦をくりひろげる。夏場の草取りの大変さを相撲に例えて面白おかしく仕上げることに成功している。簡潔にして明瞭。川柳や浪曲、写真も楽しむ吉川さんの遊び心が句になった。

ほどほどのけふの稼ぎや大西日

高橋孝伯

生活感の滲み出た句。氏は道後温泉界限を基点に人力車を引く俵夫を生業としている。天候に左右される職業の一つだろうが、そこそこの暮らしができればよし、ほどほどを良しとする潔さ。作者のおおらかで温厚な人柄を感じさせる。知足を実践する生活ぶりは、山頭火の生き様にも通じる。

ミニトマト育てつくづく小市民

松本奈月

自らを小市民と言っているが、自身を揶揄したり蔑視している訳ではない。むしろ身の丈で市井に生きる逞しい自分に自信と誇りを持っている。達観の域にある年配者の作と思いきや、作者は二十三歳。

「しぐるるや芯に紅ある京の菓子」「子を叱る時は伊予弁冬の雷」の句もある。

疫病の世ゆるゆる生きる蝸牛

村上邦子

疫病の世であろうが無かろうが、蝸牛の歩みは不変であろう。しかし、人間は近代化、機械化の生活の中、多大な犠牲を払い、人間らしさを失ってきている気がする。コロナ禍は、便利な世に慣れ過ぎた人間への警鐘とも思える。人間は、ゆるゆると生きる蝸牛をお手本にすべきかもしれない。